1970 年代のパプアニューギニア観光
――国立民族学博物館所蔵多賀俊介パプアニューギニア資料の分析――

丹羽典生
（国立民族学博物館）

１．はじめに

民族学的資料の収集や民族的なイメージ消費という文脈において、パプアニューギニアは、オセアニアのなかでも日本人の関心を殊に引いてきたと思われる。第二次世界大戦前は日本の戦争を通じた太平洋への進出という文脈があり別途検討が必要となるが、戦後という制限を設けたとしてもそういえる。たとえば、日本のテレビ番組におけるメラネシア表象を分析している文化人類学者の白川千尋によると、1960 年から 2002 年にかけてテレビや書籍でもっとも取り上げられたメラネシア地域は一貫してパプアニューギニアであった（白川 2014: 31, 33, 43, 53, 61, 96）。

それを裏書きするように日本における代表的なオセアニアコレクションには、パプアニューギニア芸術に関するものがある。とくに大規模なコレクションには、新潟県南魚沼市の今泉記念館アートステーション、埼玉県の鶴ヶ島市が所有するオセアニア民族造形美術品などがある（埼玉県鶴ケ島市教育委員会 2000 ; 田所 2001）。それらはいずれも新潟県で公職を務めた今泉隆平と輸入業者パシフィックアーツの店主である大橋昭夫によって収集されたパプアニューギニアを中心とする美術工芸品がもととなったコレクションである。その後、南山大学、天理大学、早稲田大学にそれぞれに分割されて寄贈されている [1]。政府や学術調査隊によって収集されたわけではないという意味で、個人コレクションをベースとしているわけである。

実際個人的な経験としても、筆者が勤務している国立民族学博物館ではオセアニアに関する個人コレクションの寄贈受け入れの相談を受けることがままある。そして筆者が 10 年以上の勤務のなかで相談をうけた資料の多くは、パプアニューギニア関係（それもセピック流域の民族芸術品）であった。

本稿で扱うのは、より限定した日本人によるオセアニアイメージの受容についてで

[1] コレクションの来歴については、南山大学人類学博物館の記事（http://rci.nanzan-u.ac.jp/museum/katsudou/kasou/019229.html）を参照（2022 年 10 月 4 日閲覧）。また早稲田大学の本庄早稲田の杜ミュージアムにおいても近年同コレクションに基づく展示「オセアニア民族造形美術品展――高地・山岳地帯の極彩色豊かな精霊と文化」が開かれた。早稲田大学による記事（https://www.waseda.jp/culture/news/2022/06/07/16701/）を参照（2022 年 10 月 4 日閲覧）。

ある。具体的には、戦後の高度成長を経て、観光のために訪問した日本人によるパプアニューギニアのイメージの受容とその利用について、国立民族学博物館所蔵のコレクション資料を用いてみていきたい。

パプアニューギニアと特別な歴史的・個人的関係をもたない日本人がどのように観光を享受し、そこで手に入れたオセアニアイメージをいかに使用したのかは、個人的な領域に属する。そのため、多分に研究として扱いにくい。本稿では、収集者である多賀俊介氏が観光客としてパプアニューギニア滞在時に集めた写真資料を分析することでそのようなイメージ消費の領域にアプローチしたい。研究者でもなく、当該地域との個人的な関係をもっていたわけでもない日本人が、観光客としてどのようにパプアニューギニアを消費し、そしてその経験を活用していたかを分析する。この分析を通じて、異文化を消費する経験について呈示していきたい。

２．収集者と収集の経緯

本コレクションの収集者は、多賀俊介氏である。1950 年に広島県呉市で生まれた同氏は、広島大学大学院文学研究科にて博士課程（地誌学専攻）を中退してから、広島県の高等学校にて社会科専任教諭として勤務した。退職後は、出生地である広島における被爆原爆に関するボランティア活動にも積極に関わっている [2]。いわゆる研究者としての経歴をもつ方ではないが、専門教育で得た知識を生かしながらいくつかの文章を公表している（文末の多賀氏執筆文献一覧を参照）。特に広島に関する地理学的なエッセイはこうした彼の生まれと経歴の交叉する興味深い成果であると考えられる（多賀 1999, 2019）。

地誌学を専攻するなど大学生の時分からアジアアフリカへの関心をいだいてはいたものの、多賀氏がパプアニューギニアに足を運んだのは多分に偶発的な事情であった。本人や家族の戦争体験とは関係がない。太平洋戦争の時代を通じてパプアニューギニアとの関わりが生まれた日本人は数多いが、彼の場合はその例にあたらないという。きっかけはある雑誌の表紙であった。高等学校の地理の授業の一環で焼畑について教えていた彼は、『週刊朝日百科 72　世界の植物――文化を生んだ栽培植物』（1977 年 4 月刊行）に目を引かれた。そこにはパプアニューギニアにおける焼畑の状況が紹介されていた。それまで焼畑というと山を焼きハック（鍬）で耕すと教えていた。しかし雑誌の表紙や記事によると、スペード（スコップ）を使用して耕作している場所があることを知り、また、近代化がすすんでいながら耕作方法が木製のハックからトラク

[2] 多賀氏のボランティア活動については、たとえば朝日新聞の記事検索聞蔵などで、1995 年から 2021 年のあいだに関連記事を見つけることが出来る。（当該サイトにて、2022 年 5 月 23 日に検索した。）

ターに一気にとって代わられるわけでないことにも興味を引かれたという[3]。

このようにしてパプアニューギニアへの関心に俄然とかき立てられたとき、独立後３年を迎えたパプアニューギニアの政府観光局から、おそらく観光開発の目的から「パプア・ニューギアの旅（モニターツアー）」の募集がかけられていたのを中国新聞の記事のなかにみつけた。多賀氏はせっかくの機会ということで、学校を休んでツアーに参加したという。取り扱いは日本通運（株）で、参加者は 20 名ほど。ほとんどが高齢者であった。およそ半分は戦争遺族の関係者であり、慰霊目的のため花を持参していた人もいたという。彼らがパプアニューギニア税関で花を没収される憂き目に遭い悲嘆に暮れていた姿が印象に残っているとのことであった[4]。

本稿で扱うコレクションは、このようないきさつで 1978 年（昭和 53 年）11 月 28 日から 12 月 5 日にかけてパプアニューギニアに旅行した際に、撮影された記録写真を中心に構成されている。したがってコレクションに収蔵されている資料は、基本的にこのツアーの旅程にしたがって見聞したことが並べられている。別の言い方をすれば、パプアニューギニア政府観光局が、観光のポイントとして呈示した文化的アイテムのなかから、参加者である多賀氏が興味をもって撮影した部分から構成されているともいえる。撮影された写真自体は 400 枚程度あったが、そこから選別して 100 枚のスライド写真にまとめたという[5]。

このまとめ方が、記念写真を意図していたわけではない点に注意を要する。現状のコレクションのかたちで写真を配列した理由は、自身が勤務していた高校の授業（50 分）の教材として使用するためであった。つまり異なる文化をもつ人々の生活を、生徒に紹介することが念頭に置かれていたわけである。

こうしたそもそも写真が撮影され編集された過程を念頭に置くと、写真に写された文化的アイテムのなかにパプアニューギニアの儀礼と舞踏があるのは理解しやすい。たとえば、撮影されているシンシンやマッドメンダンスは、パプアニューギニアの観光イメージとしてはいまでも定番となる題材であるからだ。また各種マーケットからヴィレッジハウスまでの風景や、農作業及び農作物展示場の様子を撮影した一連の写真は、慰霊とは別の目的の観光コースとして設定されていた場所であることを例証している。また後者の箇所は、特に多賀氏の個人的な関心にそって撮影の対象とされた

---

[3] 以下、多賀氏に関わる論述で参照文献を付していない箇所は、多賀氏へのインタビューに基づく。インタビューは、2022 年 6 月 14 日に Zoom にて行った。

[4] ツアーには、ウェワク・マダンコース、キエタ・ラバウルコース、マウントハーゲン・ゴロカコースの 3 種類があったという。前二者が戦跡巡拝を目的としており、多賀氏が参加した最後のマウントハーゲン・ゴロカコースが観光のコースで農業の様子も見学できた。

[5] そのためたとえばツアーに同行していた方の写真などは、スライドには含めていないという。

ことも分かる（詳細は後述）。

３．コレクションの内容

今日国立民族学博物館に所蔵されている多賀俊介氏の寄贈によるパプアニューギニア関連資料は、100 枚程度の写真と若干のモノからなる。写真には、撮影年月、民族・国などの撮影地という基礎的な情報が個々につけられており、それと併せて収集者による若干の解説が付されている。モノとは、ツアーのあいだに購入された品々である。点数はそれほど多くなく、ポートモレスビーのヴィレッジハウスやゴロカの博物館で購入された石斧のほか、関連する書籍・パンフレット・地図、そして滞在時に購入された新聞などから構成されている。また、国立民族学博物館に寄贈された資料には含まれていないが、もとの収集品のなかには、マウントハーゲンのある村で、老人から購入した木製のハックがある。こちらは、いまでは多賀氏の勤務していた学校にて保管されているとのことである。

写真とそれに付された情報を整理すると、表 1 となる。この表は、国立民族学博物館に寄贈するに当たり多賀氏が作成したものである。本稿に掲載するに当たり若干の文言を修正して、本人の承諾のもと転載している。写真資料は旅行の始まりから終わりという時間軸に沿って、訪問した場所ごとに基本的に配列されている。ただし一部、写真 45 番から 57 番及び 54 番など資料の紹介のために別の場所で撮影した写真が挟み込まれていることもある。内容は被写体と撮影者の状況を交えて記載されている。そもそもの訪問のきっかけとなった焼畑関係の写真は、49 番から 54 番、68 番から 70 番にあることが確認できる。

特筆すべき点は、パプアニューギニアを「野蛮」な地域と聴衆が一面的に認識しないように配慮がなされていたことである。たとえば、備考には想定されている聴衆を念頭に置いてスライドを上映する際のメモが一部書かれているが、勤務先であった地元の広島と縁のある事項が特記されることで、被写体が別世界の出来事でないことが注意喚起される。またパプアニューギニアの空港にあった障害者対応の空港施設を例に出し、日本の地元の空港（当時）ではそうした配慮が見当たるかといった問題提起をしている。発展していない国と聞き手が一方的な先入観をもたない工夫が設けられているわけである。あるいは裸足で銀行のなかを歩く人の存在が目をひいた事実として指摘される一方で、そうしたイメージを固定化することなく、電気機器や家屋の鍵の使用のひろがりにもふれるなど社会の近代的な変化にも目を配っている。マッドメンダンスで観光客に恐怖心を抱かせるというのはいまでも定番であるが、この踊りを紹介する際にも観光という文脈のものであることが明示されている。

４．最後に

本稿であつかったコレクションはどのような文脈に位置づけられるだろうか。その点について最後に触れたい。まず、時代的状況について確認してみたい。コレクションが形成されたのは、収集者が 1978 年の年末におこなわれたパプアニューギニア旅行に際して集めたものであった。パプアニューギニアは 1975 年 9 月 16 日にオーストラリア信託統治領から独立を果たしている。その意味で訪問の時期は、独立直後にあたる。同地が急激な社会変化にみまわれる時期の姿を写したもので、当時の観光産業の状況を知ることができる資料である。

日本との関係という文脈を考えると、第二次世界大戦の終結から 33 年後にあたる。終戦から一世代以上の時間は流れていたわけだ。しかし同時に、横井庄一がグアムで確保されたのが 1972 年、小野田寛郎がフィリピンから帰国したのが 1974 年であることを考えると、戦争の傷跡が深い地域では、太平洋戦争というものがまだまだ十分リアルな存在感をもっていた時期でもあった。実際、多賀氏自身が証言するように、３つのツアーのオプションのうち２つが戦没者関係であったし、途中で眼にした遺骨収集団のすがたは強く印象に残っていたようだ。

ところが表に掲載された写真リストからもみてとれるように観光ツアーを通じた経験では、そうした事実はみえてこない。これは収集者がそうした過去の日本と関わる消極的な事実を意図的に避けていたということではなく、パプアニューギニア観光局の提示したコースのなかにそもそも含まれていなかったということである。さらに、彼がコースを見学するなかでも過去の関係を想起させる出来事があまりなかったからであろう[6]。また、この写真資料が、時間も限られている高等学校における地理の授業を念頭において整理されたことも関係していよう。

本稿では、国立民族学博物館の多賀コレクションを紹介しながら、1970 年代のパプアニューギニアの観光とその個人的な受容について述べてきた。ここで述べた資料の見方や活用の仕方は、あくまで筆者が整理したひとつのかたちにすぎない。将来的には、関連した複数の資料と重ねあわせて検討することで、本稿が、戦後の日本におけるパプアニューギニアとのかかわり、及び日本における当該地域に関する知識の一般への普及の様子を考察する一助となれば幸いである。

[6] ただしまったくなかったわけではない。多賀氏がゴロカを観光していた際には、公園に日本軍戦闘機の残骸が展示されていることを目撃したという。国立民族学博物館に寄贈されなかった写真には、その写真も含まれているという。

＜資料＞

表１　パプアニューギニアにおける旅程と写真リスト

番号	月日	場所	内容	備考
1			日本とパプアニューギニア位置関係地図	
2			パプアニューギニア地図	
3	12 月 2 日	チンブー	シンシンの一場面	導入の問いかけ「パプアニューギニアの人は「野蛮人」？」
4	11 月 30 日	ポートモレスビー	ジャクソン空港で待つ女学生（オーストラリアからクリスマス休暇で故郷に向かうために待っている様子）	現在の一面を紹介
5	11 月 28 日	鹿児島空港	Air Niugini 機に搭乗	出発
6	〃	太平洋上空	パプアニューギニアへ	
7	〃	ポートモレスビー	ジャクソン空港入国手続きカウンター	
8	〃	〃	日通旅行添乗員	
9	11 月 29 日	〃	トラベロッジ（ホテル）、電卓を使う受付	
10	〃	〃	スティムズシップスーパー（トラベロッジを望む）	
11	〃	〃	スティムズシップスーパー前の風景	
12	〃	〃	銀行（はだしの人も）	
13	〃	〃	ヴィレッジハウス（使われなくなった民具等を売っている。神聖とされる仮面が売られている理由は。信仰との関わりは？）日本からのバイヤーも来る。ホテルや喫茶店で売れるとか。	文化変容
14	〃	〃	熱帯のきれいな花	
15	〃	〃	自動車会社の販売店もある	マツダは広島の企業。広島との関係
16	〃	〃	コキマーケット	

17	〃	〃	コキマーケット。雨の中ピーナッツが売れるのを待つ男性	
18	〃	〃	水上家屋集落	海パプア
19	〃	〃	水上家屋集落生活の少女	同行旅行者が菓子を投げる
20	11 月 30 日	〃	ジャクソン空港前の旅人木	
21	〃	〃	ジャクソン空港：身障者用トイレ	
22	〃	〃	ジャクソン空港：女学生、白人客、日本人観光客など	
23	〃	〃	ジャクソン空港：マウントハーゲン行旅客機	
24	〃	〃	ポートモレスビー上空	荷物依頼で一度引き返し
25	〃	？	マウントハーゲン行旅客機：パーサー	
26	〃	？	マウントハーゲン行旅客機：機内食	
27	〃	？	マウントハーゲン行途中機上から熱帯雨林	
28	〃	ガルフ州の川？	マウントハーゲン行途中機上からメアンダー	
29	〃	チンブー州南部？	マウントハーゲン行途中機上から集落の滑走路？	
30	〃	マウントハーゲン？	マウントハーゲン行途中機上から焼き畑農地？	
31	〃	〃	マウントハーゲン行途中機上から土地利用	
32	〃	〃	マウントハーゲン行途中機上からプランテーション農園？	
33	〃	マウントハーゲン	マウントハーゲン空港	
34	〃	〃	マーケット入口標識「KAI　KAI」（食物の意）	
35	〃	〃	マーケット：キャベツがあるよ	
36	〃	〃	マーケット：バナナがあるよ	ここで採れる？
37	〃	〃	マーケット見渡し風景	

38	〃	〃	タロイモを売る奥地？から来た男性	
39	〃	〃	マーケット：右の男性がドライバーのヘンリーさん	
40	〃	〃	アンブラ山頂より遠望：医療専門学校、コーヒー・芋畑	
41	〃	〃	コーヒーの木	
42	12 月 1 日	〃	コーヒーチェリー	
43	〃	〃	かごを編みながらコーヒーバイヤーを待つ女性たち	手前は同行観光客
44	〃	〃	コエブカ村、コーヒー豆を積む車	車種はトヨタ
45	12 月 3 日	ゴロカ	コーヒー製造工場	工場写真はゴロカしかないので、代用
46	〃	〃	コーヒー選別装置	〃
47	〃	〃	コーヒー選別の建物	〃
48	12 月 1 日	マウントハーゲン	コーヒー豆を乾燥させているモア村を通りがかる	
49	〃	〃	自分は日本の地理教員で「ニューギアでは農業で使っていると教えている」と説明し、モア村の人々にハック（堀棒）を見たいと聞いてみた。	
50	〃	〃	村人はさあ？という感じであったが老人が出てきて「昔使っていた。今はそのあたりに放置している」と持ってきて昔の様子を再現してくれた。子どもたちは初めて見るようだ。	堀棒は譲りうけて、帰国後勤務校に保管した。
51	〃	〃	ハックで穴をあける。	
52	〃	〃	穴にヤム芋の苗を植える再現①	
53	〃	〃	穴にヤム芋の苗を植える再現②（墓堀にも道路工事にも同じ棒を使ったと説明を受ける）	
54	12 月 2 日	東ハイランド州西部	今は堀棒でなくスペードを使うよう。	同じ村では適当な写真撮れず、途中撮影した別の写真を挿入

55	12 月 1 日	マウントハーゲン	ドラインディ小学校近くでシンシン参加準備の人々	バイヤーリバーへの途中
56	〃	〃	バイヤーリバー付近の芋畑	
57	〃	〃	バイヤーリバーの熱帯鳥①	
58	〃	〃	バイヤーリバーのゴクラクチョウ	
59	〃	〃	バイヤーリバーの熱帯鳥②	
60	〃	〃	ドラインディ小学校近くでシンシン（クリスマス募金の目的も）	バイヤーリバーからの帰途
61	〃	〃	ドラインディ小学校でのシンシン開始前	このシンシンに飛び入り参加した
62	11 月 30 日	〃	村の小学校	小学校のようすを示す
63	12 月 1 日	〃	ドラインディ小学校近くの教会シスターたち	
64	〃	〃	教会前でシスターとお別れ	
65	〃	？	マウントハーゲンからラエに向かうハイウエイ	
66	〃	チンブー州西部	家屋形態	
67	〃	〃	茶のプランテーション	
68	12 月 2 日	東ハイランド州西部？	焼畑？①	焼畑についてふれる
69	〃	〃	焼畑？②	
70	〃	〃	焼畑跡地	
71	12 月 1 日	チンブーからゴロカに向かう途中？	エリバリ山	
72	〃	チンブー	チンブーの町	
73	〃	〃	チンブーロッジ	
74	12 月 2 日	〃	シンシン会場のポリスカー	公的な性格がある
75	〃	〃	シンシン会場グラウンド内の農産物展示場	品種紹介など
76	〃	〃	農産物展示場内	
77	〃	〃	農産物展示場内タロイモ	
78	〃	〃	農産物展示場内タロイモの説明	

79	〃	〃	農産物展示場内でコーヒー豆をひく担当の少年	髪が金髪なのは？
80	〃	〃	シンシン会場グラウンド内の公的機関のムービーハウス	
81	〃	〃	シンシン行進①	
82	〃	〃	シンシン行進②	
83	〃	〃	シンシン風景①	
84	〃	〃	シンシン風景②	
85	〃	〃	シンシン風景③	
86	〃	〃	シンシン風景④	
87	〃	〃	シンシン風景⑤グループ名表示の看板？	
88	〃	〃	シンシン風景⑥	
89	〃	〃	シンシン風景⑦ヒクイ鳥のぬいぐるみ？	ここにはいない動物
90	〃	〃	シンシン風景⑧マンモスのデコレーション？	〃
91	〃	〃	シンシン風景⑨フランケンシュタインのお面をかぶった人が白人少女に挨拶している	
92	〃	東ハイランド州アサロ村	マッドメンダンス開始前	何がおこる？
93	〃	〃	マッドメンダンス①	何か不思議な人？が
94	〃	〃	マッドメンダンス②	
95	〃	〃	マッドメンダンス③	
96	〃	〃	マッドメンダンス④	怖い！
97	〃	〃	マッドメンダンス終了後の記念撮影（左端が寄贈者）	なんだそうなのか
98	〃	〃	弓矢パフォーマンス	
99	〃	〃	火起こしパフォーマンス	
100	〃	〃	鍵のついた家屋	意識の変化
101	12 月 3 日	ゴロカ	ゴロカ遠望	
102	〃	〃	街角風景	
103	〃	〃	選挙用ポスター	

104	〃	〃	タロ芋、ヤム芋畑	
105	〃	〃	ヤム芋、サツマ芋、トウモロコシ畑	
106	〃	〃	映画ポスター	
107	〃	〃	ブティックショップ	
108	12 月 4 日	〃	スーパーマーケット①	
109	〃	〃	スーパーマーケット②	
110	〃	〃	ゴロカ空港	
111	〃	〃	ゴロカ上空からコーヒー畑、川のメアンダー	
112	〃	〃	ゴロカ上空から	
113	〃	〃	ゴロカ上空から村落	
114	〃	ポートモレスビー	ポートモレスビー上空	
115	〃	〃	ポートモレスビー水上生活の子どもたち	帰ってきたよ
116	12 月 5 日	〃	ポートモレスビージャクソン空港	帰国へ
117	〃	〃	ポートモレスビー上空	ありがとうさようなら

＜謝辞＞

本稿のきっかけは多賀俊介氏収蔵の資料の国立民族学博物館への寄贈の相談を筆者が受けたことからはじまった。文中でも記したとおり表１はもともと国立民族学博物館への寄贈にあたり多賀氏が作成したものを論考として公開するために、丹羽が若干の加筆修正を行ったものである。また多賀氏が資料を収集した観光旅行などの収集の文脈については、同氏へのインタビューに全面的に依拠している。その意味で、本稿は多賀氏の助力なしには完成しえなかったであろう。記して感謝を申し上げる。

＜参考文献＞

白川千尋

2014　『テレビが映した「異文化」――メラネシアの人々の取り上げられ方』風響社

埼玉県鶴ケ島市教育委員会（編）

2000　『ニューギニア神と精霊のかたち――Image of Spirits』里文出版

田所聖志

2001　「書評：埼玉県鶴ケ島市教育委員会（編）　2000　『ニューギニア神と精霊のかたち――Image of Spirits』里文出版」『民族学研究』66(3): 371。

＜多賀俊介関連書誌一覧＞

成瀬敏郎・大竹義則・府本礼司・多賀俊介

1974　「広島県西条砂礫層を切る新しい断層」『東北地理』26 (1): 51-51。

多賀俊介

1986　「高等学校における地図学習のねらいといくつかの試み」『地理科学』41 (1): 47-49。

1988　「気候と地形」廿日市町（編）『廿日市町史 通史編（上）』廿日市町、広島: 廿日市町、27-54 頁。

1999　「広島で教える（現代世界をどう教えるか 1999）」『地理』44 (増刊): 55-59。

2019　「原爆で失われたものは?：地名を手がかりに考える（特集 消えた地名・消された地名・消えゆく地名）」『地名と風土：人間と大地を結ぶ情報誌』13: 51-58。